

『金の船』にみる大正期児童雑誌の読者像

伊藤 小穂

本研究は、大正期に盛んになった童話雑誌がなぜ短命に終わる傾向にあったかを、『金の船』を対象として明らかにすることを目的とする。日本の児童文学は大きく芸術的児童文学と大衆的児童文学に区別することができる。大正期は、芸術的児童文学にあたる童心主義が誕生し、鈴木三重吉の主宰する『赤い鳥』を中心に、子どもの童話・童謡が注目された時代である。当時、『おとぎの世界』（大正 8 年）、『金の船』（大正 8 年）、『童話』（大正 9 年）等の童話雑誌が数多く誕生した。しかし、ほとんどの雑誌が大正 15 年までには廃刊し、その発行期間は短い。一方で、『少年倶楽部』（大正 3 年）を中心とする大衆的児童文学に区分される雑誌はいずれも長く発行され続けた。大日本雄弁会講談社から発行された『少年倶楽部』は昭和 37 年 12 月号の廃刊まで約 50 年もの間発行された。

『金の船』は、『赤い鳥』や『童話』と並び、三大児童雑誌と呼ばれている。編集は斎藤佐次郎（1893 - 1983）が行った。『金の船』は発行人横山寿篤（1887 - 1975）とのすれ違いにより大正 11 年の 4 巻 6 号から誌名を『金の星』に変更した。さらに、昭和 3 年 5 月から『少年少女 金の星』と改題し、斎藤佐次郎が編集発行の責任者を降り、南達彦（1898 - 1963）が大衆誌へ方向転換したが、長くは続かず昭和 4 年 7 月に廃刊に至る。

本研究では、雑誌『金の船』と『金の星』（金の星社編集の複製版『金の船 = 金の星』（ほるぷ出版刊、1983）を使用）の価格、頁数、誌友、読者欄、編集欄を分析した上で、斎藤佐次郎著、宮崎芳彦編の『斎藤佐次郎・児童文学史』（金の星社、1996）や、大正期の児童読書調査を主に用いて、社会背景や雑誌編集部状況、斎藤佐次郎の目指した雑誌像等を考察した。

『金の船』の読者は国内外に多数存在しており、個人だけでなく学校や団体などでの購読もあった。芸術的児童雑誌は教師や両親など大人が児童に勧める傾向にあった。大人が子どもに読ませたい雑誌であったと考えられる。しかし、大正期末は関東大震災や円本ブーム、昭和恐慌などの影響を受け、景気が低迷していた。また、児童雑誌の競争も激しく、徐々に娯楽性の強い大衆的児童雑誌が発行部数を拡大していた。

『金の船』が廃刊に至った理由の一つは、読者の多様化に編集部が適応できなかった点にある。童話・童謡に対する読者の熱は冷めつつあったが、教育に関わる大人や教員は関心を寄せていた中で、大衆的児童雑誌を参考に雑誌を変容させて子ども読者を獲得することもままならず、その一方で芸術的児童文学に関心をもった教員、大人読者に対する雑誌として変化することもできなかったことが、『金の船』の限界をつくってしまったと考えられる。

（指導教員 原 淳之）